書評

松島隆眞　著

漢帝國の成立

杉村伸二

一

戰國後期から前漢前半期にかけての古代帝國形成史研究は、今世紀に入って議論が活性化している分野のひとつである。その一つの契機として、睡虎地秦簡や張家山漢簡をはじめとする新出簡牘史料の公表が寄與していることは間違いないが、傳統的な文獻史料たる司馬遷『史記』の讀み直しによって、新しい解釋がなされているところも大きい。近年では、『史記』が司馬遷の歴史觀や司馬遷の用いた原資料から大きな影響を受けたものであることを前提とし、それらの影響を考慮しながら、『史記』に記されている敍述の内容を、その背後にある歴史的狀況の中で再解釋する、という手法がとられるようになった。そうした新しい研究手法からの、新たな古代帝國形成史が描かれ始めている。著者もそうした手法から前漢前半期の讀み直しを進める若手研究者のひとりである。その著者が「漢帝國の成立」という、まさに王道ともいえるテーマに挑んだのが本書である。

本書はまず、短いはしがきから始まり、それに續けて、以下のような構成をとっている。

序　章　統一國家の形成
第一章　漢王朝の成立――高祖劉邦と功臣たちの軌跡
第二章　陳涉から劉邦へ――秦末楚漢の國際秩序と正統性の原理
第三章　「郡國制」を問い直す――前漢前期の國制
第四章　呂氏專權の實像――前漢國家の全國支配とその波紋
第五章　文帝の登場――孝文初年の政局と功臣・諸侯王
第六章　賈誼匈奴論再考――文帝期の北邊防衛改革とその顚末
第七章　淮南問題と「地制」のあいだ（上）――賈誼の對諸侯王策「分國策」と「天下」一體化への構想
第八章　淮南問題と「地制」のあいだ（下）――賈誼の對諸侯王策「藩屏强化策」と孝文年間の諸侯王國再編
第九章　吳楚七國の亂への道――漢王朝と諸侯王國の運命
終　章　漢帝國の成立と郡縣制の確立

全部で十一章からなる大著である。二〇一二年に京都大學に提出された博士論文を原型にしたもので、うち序章と第一章・第二章、そして第六章と第七章は既出論文をもとにしている。ただし既出論文から大幅に增補・改訂されており、その意味では、ほとんどが書下ろしとも言える。また、各章末には多くの注釋が施されており、參考にした先行研究が數多く示されることからも分かるように、著者は膨大な先行研究を幅廣く押さえている。あとがきでは、書下ろしが多いことを「著者の怠惰」とするが、著者には本書に收錄されない論文もあり、ここ數年で著者が精力的に研究を進められてきた

ことを示すものである。まずは本書の概要から見ていこう。

二

まず序章において、漢帝國形成史で常套的に使用されてきた「劉邦集團」「郡國制」という用語についての再檢討を行ったうえで、漢王朝と諸侯王國との共存體制の形成から、漢王朝と諸侯王國とを含めた「統一國家」としての「漢帝國」が成立する過程を明らかにする、という本書の目的が述べられる。あわせて「統一國家」としての「漢帝國」の成立を見ていくうえで、功臣層や諸侯王の動向とともに、「匈奴の脅威」についても問題意識として注目することが豫告されている。近年の研究においても、漢初「郡國制」を積極的に評價しようとする試みや、漢初の漢と諸侯王國との關係を「內」「外」の關係で捉えなおし、それらが一つの秩序を共有していたことへの視座、また、そうした狀況が武帝期の對匈奴戰爭などを契機として「帝國」として一體化していく、として論じられ始めている。[1] そうした最新の研究狀況を踏まえたうえで、筆者がそこにどれだけ新たな見方を提示できるのかが興味のあるところである。

第一章と第二章では、秦末の軍事集團の一つから始まった劉邦集團が、「天下」・「中國」の一部としての「漢王朝」にまで成長する過程、さらには、「漢王朝」と諸侯王國との併存體制がどのように形成されてきたのかを論じる。第一章では、秦末楚漢期の爵制の分析から、「漢王朝」の成立を、項羽十八王擁立により漢王となった劉邦が、自ら爵の頒布者となり得た時點とする。續く第二章では、秦末楚漢期には戰國後期以來の秦と舊六國という國際的な枠組みに制約されていたこと、王として認められるには他國の王より承認される必要があったこと、劉邦はそうした枠組みの中で、諸國間の調停者として諸王から皇帝に推戴されたことなどを明らかにする。項羽體制の崩壞から楚漢戰爭の歸趨に、舊梁地の歸屬問題があったという指摘は興味深い。

歷史的展開から一旦離れて「郡國制」のもとでの制度の在り方を考證する第三章は、筆者の持ち味が最大限に發揮され

ている章と言える。漢初の漢と諸侯王國とには自立的な側面と一體的な側面とが入り雜じっている。從來の研究でも、何度も議論の俎上に上がってきた「郡國制」下の諸制度について、これまでの議論を整理しつつ丁寧に檢證する。結論的には、漢と諸侯王國とはある程度の一體性を有していた、と穩當なところに落ち着いているが、諸說入り亂れている狀況を、きちんと交通整理して見せるところが著者の持ち味のように思われる。

呂后專權の政治構造を、漢と諸侯王國との關係のなかで論じる第四章では、呂氏が專權を成し得たのは、趙國に基盤を持つ張氏三代（張耳―張敖―張偃）の存在があったことを指摘する。呂氏と張氏とは、呂后の娘である魯元長公主と張敖との婚姻、さらにこの二人の娘が惠帝皇后となる、という强い結びつきがあったことが知られている。從來、呂氏の專權に附隨して張氏の尊重が述べられてきたが、著者は逆に陳豨の亂を契機とした張敖の復權に附隨して、呂后の强大化が始まったとする。劉邦集團に屬さないとされる「張王の客」への着目や、陳豨の亂を導いた趙國における反高祖の風潮と匈奴の對立構圖とを結びつける點など斬新な視點が提示される。ただ、趙國における反高祖の氣風を釀成した然諾を重んずる氣質を、かつて信陵君の食客だった張耳の經歷による「信陵君の記憶」と結びつけるのは些か行き過ぎな氣もする。

第五章から第八章までは文帝期に對する考察である。導入となる第五章では、諸侯王から漢の皇帝となった卽位直後の文帝が、如何にして權力を安定させることが出來たのかを、諸侯王、功臣層との關係から見る。高祖劉邦とは異なり、すべての諸侯王に推戴されるという手續きを經ずに卽位した文帝の權力安定は、立太子に伴う天下への賜爵と、文帝擁立に關らなかった淮南王・吳王の入朝によってもたらされたとする。「諸侯王」や「功臣層」を一括りにせず、それぞれの內部における立ち位置の違いをきちんと見極めようしているが、これはとても大事な作業だろう。

續く第六章から第八章では、賈誼の政策提言の精緻な分析から、文帝期における漢王朝と諸侯王國との關係について論じる。文帝期には北邊諸侯王國から邊郡を收納することで、對匈奴防衞を漢王朝自らが投降胡人を用いて行う方法へと轉換、同時に、齊や淮南などの諸侯王國に分國策を施し關所を除くなど、徐々に漢王朝主導による秩序構築＝「天下」の一

體化へと進んでいく様相を、賈誼の政策の中から見出している。ただ、賈誼の政策提言と文帝期に行われた實際の政策との違いが明確には示されず、一讀しただけでは、賈誼の政策論の話なのか、實際の文帝期の政策の話なのか、なかなか讀み取りづらい。また賈誼の政策論を中心に論じているために、文帝治世の諸侯王や功臣層との關わりの變化や、匈奴對策の變化の時間軸に沿った展開も示されない。文帝の治世は、前漢前期の漢王朝と諸侯王國との關係の變化を見るうえで、とても重要な時期といえよう。だからこそ、文帝治世についても眞正面から論じて欲しかった。

第九章では、景帝期以降の「統一國家」への轉換點とされる吳楚七國の亂について論じる。亂の要因として、關中と東方の對立構造という地理的要因と、諸侯王擁立のための用地確保の必要性があったという從來からの說を再確認するが、最終的な亂の原因は、過去に吳太子を殺害した景帝そのひとにあった、とする。確かにそうだが、その景帝個人の性格も、それまでの彼の置かれた境遇や、成長過程の中から形成されたものである以上、そうした歷史的背景からの吟味は必要だろう。

終章では、武帝期における「漢帝國」の成立について論じながら、これまでの議論を總括するが、同時に、これまで見てこなかった南方情勢からの檢討もなされる。前漢前半期の漢王朝と諸侯王國とからなる「前漢國家」は、北方のみならず南方からも制約されており、言わば複數の强大な國家のせめぎあいの中に存在していた。武帝期に南越が弱體化したことで、武帝によって南方諸國が次々に郡縣化され、それにより武帝は對匈奴開戰を敢行、戰爭遂行のための財源確保のために諸侯王國のストックを奪い、諸侯王國は漢直屬の郡と變わらない機構に變貌した、というのが、著者の描く「漢帝國」の成立過程である。

著者は前漢前半期の漢王朝と諸侯王國との關係を、一定のまとまりをもった「前漢國家」と捉え、戰國以來の國の枠組から始まった漢と諸侯王國との共存體制からなる「前漢國家」が、やがて「實質的な郡縣制」としての「漢帝國」へと變貌する軌跡を、諸侯王、功臣、匈奴、爵など多様な視點を用いて描きだそうとしている。この時期の政治制度史研究には

膨大な蓄積があり、新味なところは出しにくく、結論的には從來の研究が描き出す軌跡から大きく踏み出すところはさほど多くはない。しかし多様な視點で見ていくことで、從來の研究が見落としてきた、より細部の事情にまで光を當てることに成功している。

ただ、細部への目配りが多いがために、ときおりそちらの議論に引きずられてしまい、議論の本筋が見えづらくなってしまっているところがある。思うに、緻密な考證を行うところが著者の研究の特徴であり優れた點でもあろう。それは第三章で行われる個々のテーマに關する考證や、第六章のような資料吟味などにおいて遺憾なく發揮されるところである。しかし、そうした緻密な考證の結果を一つの問題意識の下に收斂させ、本論の中にどのように組み込むかは、匙加減の難しいところである。著者の視野は廣く、語りたいことがたくさんあることは理解できるが、それらをすべて盛り込んでは、論としてのまとまりを缺いてしまうだろう。「語りたいこと」の中から、「語るべきこと」を適切に抽出する必要があるように思われる。

もっとも、議論が多岐にわたることは、それだけ著者の視野の廣さ、問題關心の幅廣さを示してもいる。若手研究者としては、下手に小さくまとまってしまうよりは、頼もしいともいえる。著者の多岐にわたる議論の中には、評者にとっても興味深い視點が幾つもあり、勉強になったところも少なくない。

例えば、秦末楚漢期の情勢を規定していた戰國後期の王國の枠組みの存在や、文帝・景帝期の諸侯王國の配置に制約を加えていた高祖擁立の諸侯王國の枠組みといった、「地域的な枠組み」の存在から、諸侯王國の問題について考えようとする視點は、この時期を理解するうえでとても重要な視點だと思う。秦末楚漢期の研究では、戰國以來の地域的な枠組みや地域差の存在が指摘されているが[2]、著者は、秦末楚漢期のみならずその後の漢王朝と諸侯王國との關係の中にも、この地域的な枠組みによる制約を想定し、その中で漢王朝と諸侯王國との關係を論じている。こうした「地域的な枠組み」を想定することは、戰國後期から前漢前半期にかけて、天下が複數の「國」に分かれているこの時期を考えるうえで、重要

な補助線となるはずである。そこで次に、著者が論じる「地域的な枠組み」について、少し考えてみたい。

三

秦末楚漢期における「地域的な枠組み」に關して、本書の內容のところでも紹介した、項羽が戰國後期には魏地であった梁を楚に取り込んだことにより、彭越率いる「魏の散卒」の存在感が增大した、とする指摘についてまずは考えてみたい。

秦末以來復活した諸侯國を規定していたのは、戰國後期の王國の枠組みであったが、秦を打倒した後に主導權を握った項羽は、自らの楚に戰國後期には魏地であった梁を組み込んだ。これによって梁地に殘された「魏人」の存在が宙に浮くことになり、すでに「魏の散卒」を結集していた彭越の浮上をもたらす。梁地における魏の再建を目指す彭越は、同じく梁＝魏の復活をめざす「魏人」劉邦と結びつき、項羽の背後を攪亂する。やがて劉邦が項羽に勝利すると梁王に彭越が擁立され、梁地の歸屬をめぐる問題は解決された。

以上が著者の描く、楚漢戰爭の歸趨を左右した梁地の歸屬問題＝「梁地問題」である。この戰國以來の地域的な枠組みと、その枠組みの中で發生した「梁地問題」は、後々まで影響を及ぼすとされ、四章以降に展開される、漢と諸侯王國との關係においてもときおり言及される。呂后期や文帝・景帝期の諸侯王國の問題にこの時期の「梁地問題」が、それほど影響を與えたとは思えないが、秦末楚漢期における戰國後期の地域的な枠組みから、彭越の存在に光を當てたのは、項羽と劉邦（あるいはかろうじて韓信）に注目が集まってきたこれまでの研究にはない、面白い視點と言えよう。

ただ、一つ氣になるのは、戰國後期から秦末にかけての「梁地」の人閒が、著者が强調するほど「魏人」としての强固な自意識を有していたのかどうか、ということである。著者は「梁地」の具體的な範圍は明記しないが、漢代においても「梁地問題」に言及している點から見て、前漢前半期の梁國に重なる地域と考えているように思われる。しかし、戰國後

期にその中心であった大梁については、司馬遷も「大梁之墟」を訪れたと述べる（『史記』魏公子列傳）ように、秦による魏滅亡（前二二五）の際に灰燼に歸しており、彭越自身が梁王となった時には舊大梁の東に位置する定陶に都をおいている。この定陶を含む大梁の東側、それは劉邦の出身地である豐沛をも含む地域であるが、そこは戰國中期には宋國のあった地域であり、前二八六年の宋國滅亡ののち、魏・齊・楚の間で歸屬の移り變わりの激しい地域であった。著者が參照する研究でも、豐沛出身者を中心とする劉邦集團は、越人を含む多國籍な集團であったことが指摘されているし、[3]「梁地の魏人である劉邦も、楚文化に親しんでいた」（一六一頁）となれば、梁＝魏の復活を熱望する「魏人」の存在についても、戰國後期のこの地の動向を踏まえて、もう少し丁寧に論證する必要があるだろう。項羽が梁地を楚に編入したこともそうだが、漢が一貫して梁地に諸侯王を擁立したことは、「魏人」の存在やこのときの「梁地問題」とはまた別に、この地域の歴史地理的な特質が關係しているかもしれない。いずれにしても、「戰國後期の枠組み」に着目するのであれば、考察を秦末から始めるのではなく、やはり戰國後期にまで射程を伸ばした檢討が必要不可缺であろう。

續く漢成立以降の「地域的な枠組み」について。劉邦の皇帝卽位とその後の同姓諸侯王封建により、劉氏の諸侯王を前提としつつ、漢王朝と諸侯王國からなる前漢國家のゆるやかな全國統治が實現されるが、この時の諸侯王國の枠組み、すなわち「高祖年間に擁立された王の分地」を、「地制」として諸侯王國の分割の基準にしたのが、賈誼の分國策である、と著者は論じる。上に述べたように、著者は賈誼の「地制」に基づく分國策や諸侯王對策について詳しく檢討するが、實際の文帝の政策において、著者が指摘するような、高祖以來の王國の地域的な枠組みが、どれほど影響を及ぼしたのかには言及がない。賈誼の「地制」論を前面に押し出したことで、かえって文帝期の諸政策に實際に影響を及ぼしていたであろう地域的な枠組みについて、見えなくなってしまっているように思う。著者が賈誼の議論から見出した「地制」そのままではないにせよ、何らかの地域的な枠組みによる制約が、文帝の政策に影響を與えていることは十分に考えられる。ただそれらは、文帝期の實際の政策を通して檢討しなければならない問題である。

この地域的な枠組みの存在と關聯して、文帝期にはそうした地域的な枠組みを超えた「天下」に對する政策も行われていることも、著者は指摘する。著者が「文帝が「天下」に君臨する皇帝としての正統性を示すべく取り組みだした政策」（二九五頁）として擧げるのが、「對匈奴政策や各種儀禮の整備」（同）、天下に對する賜爵（二八六頁～二八八頁）、除關（三九〇頁～三九四頁）などである。これらの政策が「漢王朝主導による秩序構築」「「天下」の一體化」（三九四頁）を目指したものであることは、著者の述べる通りであろう。評者はかつて、文帝期には諸侯王の存在を前提とした皇帝權威の確立のために「天子」概念や古制、天命などを用いていたことを論じたことがあったが、[4] 依然として「國內體制」としての「郡國制」を前提とした議論であった。この點についても、「高祖以來の諸侯王國の枠組み」の克服と、「「天下」の一體化」を目指す過程、という視點で捉えなおす必要があることに氣づかされた。

この、文帝期における「高祖以來の諸侯王國の枠組み」の克服と、「「天下」の一體化」を目指す施策の終幕に位置するのが、著者が述べる、武帝期における「「封建」の出現」（四七五頁）ではないだろうか。著者は「前漢前半期においては、諸侯王の擁立を「封建」と稱した例も確認され」ない（四六七頁）とし、そのうえで、元狩六年（前一一七）に行われた武帝三皇子の諸侯王擁立が、諸侯王擁立を指して「封建」と呼ぶ最初の事例であると指摘する。これまでの研究では漢初においても無自覺に「諸侯王の封建」と表現してきたが、確かに武帝以前の諸侯王擁立について史料上では「立」と表現されることが多く、「封建」や「封」という表現は、列侯には見られるものの諸侯王擁立には用いられない。この點について正面から言及されたことは無く、「「天下」の一體化」を見ていくうえで、改めて考えなければならない重要な指摘である。ただ本書では、「封建」以前の諸侯王擁立を表現する語や、諸侯王擁立に「封建」が使われるようになったことの意味について、踏み込んだ檢討はなされない。

例えば、既存の王國の枠組みが前提としてあって、薨去や廢位によって空白となっているところに「王を立てる」のと、「天下」の一部を分割して「封建」することとは、その意味するところは大きく異なってくるだろう。武帝による諸侯王

の「封建」は、諸侯王の擁立が「天下」の一部を皇帝が賜與すること意味するものであり、そこからは皇帝と諸侯王とが「天下」を共有するという意識は見出し難い。もし武帝期になって初めて確認される「諸侯王の「封建」」という表現がそういう意味を持つのであれば、漢王朝さえも拘束するものであった高祖以來の諸侯王國の地域的な枠組みは、武帝期のこの時點で完全に克服されたことになるだろう。果たしてこうした見通しは成り立つのか、著者のさらなる檢討にも期待したいが、評者も改めて考えてみたいテーマである。

四

最後にもう一點、本書を讀み進める中で、文中に「もっとも」という接續詞が多く目についた。この「もっとも」という接續詞は、前の文に對して否定的あるいは例外的な事例を附け加える際に用いる接續詞である。これが一節のうちに幾度も出てくることで、そのつど議論がひっくり返されているように感じ、いま議論が表裏どちらに轉んでいるのか分からなくなることがあった。接續詞の效果的な使用は、文章を讀みやすくするうえで必須の技術であり、評者自身もうまく使いこなせているか正直心もとない。自分の文章力のなさを棚に上げて言うのは心苦しいが、少し氣になったので、敢えて指摘しておきたい。

本書の出版に先立って、二〇一六年三月には楯身智志氏の『前漢國家構造の研究』（早稻田大學出版部）が、二〇一八年三月には柴田昇氏の『漢帝國成立前史』（白帝社）が刊行されている。いずれも本書と同じく、「漢帝國」の成立やその展開の解明という「傳統的」な問題に對し、文獻史料の徹底した讀み直しからアプローチするものである。そこに本書が加わったことで、また一段と研究の厚みは增した。さらに、里耶秦簡や嶽麓書院簡などをはじめとする簡牘史料からの研究も今後加わり、漢帝國形成史研究はますます活況を呈することだろう。著者のさらなる活躍に期待したい。

註

（1）これらの研究については、本書の序章にて詳しく紹介されている。

（2）大櫛敦弘「燕・齊・荊は遠し ――秦漢統一國家と東方地域――」（『海南史學』第五十五號、二〇一七）、柴田昇『漢帝國成立前史 ――秦末反亂と楚漢戰爭――』（白帝社、二〇一八）など。

（3）太田麻衣子「越の淮北進出とその滅亡 ――「劉邦集團＝楚人」說再檢討のために――」（『古代文化』第六十四卷第三號、二〇一二）。

（4）拙稿「秦漢初における「皇帝」と「天子」 ――戰國後期～漢初の國制展開と君主號 ――」（『福岡教育大學紀要』第六十號第二分冊、二〇一一）

二〇一八年三月　京都　京都大學學術出版會
二二糎　九十五六八十二頁　四四〇〇圓＋稅